

「ふるさと大垣」に根づく俳句文化を生かした人づくり

大垣市教育委員会 文化振興課

松尾芭蕉が『奥の細道』の旅を終えた大垣市は、「奥の細道むすびの地」として、市民が俳句に親しみ、俳句を通して郷土愛のある人づくりを行うことをめざし、学校で、地域で、また地域を超えて以下のように取り組んでいます。

1 俳句文化に触れる「ふるさと魅力体験事業」

平成27年に「大垣の自然や歴史、産業、俳句文化等について学び、ふるさと大垣に誇りと愛着をもち、大垣のすばらしさを語るができるようにする。」を目標としてスタートした「ふるさと大垣科」では、市内の小学校6年生が「ふるさと魅力体験事業」として、「奥の細道むすびの地記念館」を訪れます。



俳句手帳

展示物を見ながら、芭蕉と大垣の人々との交流について、学芸員から話を聞いた後は、実際に芭蕉が訪れた川湊を歩き、吟行（俳句づくり）をします。一人ひとりが、市作成の『俳句手帳』を手に、見たもの感じたことを俳句にします。じっくりと言葉を選んでよんだ俳句を披露し、「同じ俳句は一つもないね。」と、それぞれの俳句と作り手を認め合います。



川湊での俳句づくり

2 俳句に親しむ「投句環境づくり」

「ふるさと大垣科」では、小学校1年生から中学校3年生まで、年間3～5時間程度の俳句の授業を行います。テキストや指導計画にそって系統的に学習を行い、俳句講師として、地域人材を活用しています。

目まぐるしく変化する情報社会を生きる子ども達の中には、「季節や自然の変化に気づくこと」「自分の感じたことを言葉にすること」に、苦手意識をもつ子どもが多くいます。17音の俳句をつくることを繰り返すことによって、気軽に表現活動を行ったり、より良い言葉を選択したりする経験を積むことができます。思いがけず、自分の俳句が仲間に認められたときの子ども達は、本当にうれしそうです。

つくられた俳句は、市が毎月募集する「十六万市民投句」や、「春の芭蕉祭」「芭蕉蛤塚忌全国俳句大会」などへも投句しています。また、市内の全小中学生の俳句から優秀作品を集めた「ふるさと句集」を作成し、今後の俳句づくりへの意欲向上につなげています。



ふるさと句集

3 俳句の世界を広げる「大垣プラン」

大垣市では、平成19年より毎年、俳人の夏井いつき氏を市内の小学校へ招き、「学校句会ライブ」を行っています。当初は毎年3校への訪問でしたが、令和元年度より「教員に俳句指導の力をつけること」を目標に加え、「学校句会ライブ」2校と、教員研修としての「教員句会ライブ」「俳句の授業講座」をセットにした「大垣プラン」をスタートさせました。

令和2、3年度については、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から、「学校句会ライブ」を中止としましたが、令和3年8月には、市内の教員を対象に「教員句会ライブ」「俳句の授業講座」を実施しました。受講者からは「俳句の教育的効果を実感した。」や、「俳句の授業に苦手意識があったが、指導法が分かり楽しくできそうだ。」などの感想が寄せられました。



学校句会ライブ



教員句会ライブ

4 俳句でつながる「教室・交流事業」



子ども俳句教室にて 大垣城へ

学校以外でも、俳句づくりを通して子どもたちが成長できる場として「こども俳句教室」を実施しています。市内の小中学生20人程で年間4回の活動を行います。奥の細道むすびの地記念館に集合し、講師から季語の話聞いた後、大垣城や公園へ出かけたり、お正月遊びをしたりと、その時期に合わせた活動を行います。秋には「初めて蓑虫を見た。」と感激する子もいました。講師からは、「何分も一つのものを見てみよう。」と声掛けがあり、いつの間にか俳句手帳には「どんぐりをふみたくなくてよけ歩き」など、素直な心をよんだ句がどんどん増えていきます。記念館に戻って句会を行い、自分のお気に入りの句を交流します。学校も学年も様々な仲間が、俳句でつながっていきます。

また、例年「奥の細道矢立初めの地」である東京都荒川区との交流を行ってきました。令和2年度は実際の交流はできませんでしたが「奥の細道矢立初めの地 子ども俳句相撲」へ、大垣市内の6年生代表児童が書面投句を行い、横綱（1位）を頂きました。

小中学生のみならず、高校生が参加しやすい俳句教室や英語俳句の募集、成人向けの俳句教室の開催や、十六万市民投句・文芸祭などの投句機会確保を継続し、俳句文化を生かして、大垣市第2次教育振興基本計画文化振興の基本目標である、「文化芸術活動を充実し、豊かな創造力を育む人づくりをめざします。」の具現に向けて今後も取り組んでいきます。